

〔特産熱帯果樹等の安定生産技術の開発〕

小笠原の気候を活かした有望作目の生育・果実特性の把握  
～ジャボチカバの収穫特性～

宗 芳光・岡崎正規\*・佐藤澄仁\*<sup>2</sup>・近藤 健\*<sup>3</sup>・河野 章\*<sup>4</sup>  
(小笠原農セ・\*東京農工大) \*<sup>2</sup> 現営農研修所・\*<sup>3</sup> 現西多摩普セ・\*<sup>4</sup> 現園芸技術科

---

【要 約】小笠原村で施設栽培すると収穫回数は年7～9回で、発蕾から収穫適期までの収穫サイクルは平均で34.2日であった。収穫サイクルは夏季に短く、冬季に長いことから、気温や日長時間の影響を受けていることが考えられた。

---

【目 的】

小笠原村を訪れる観光客に向け、年間を通じた熱帯果樹の供給体制の確立が求められている。ブラジル原産のジャボチカバ（フトモモ科）は四季なりと言われており、主力農産物の端境期に出荷でき、生食だけでなくジャムなどの加工原料としても期待される。そこで、ジャボチカバを小笠原村で栽培し、収穫特性を明らかにする。

【方 法】

2000年に購入した大葉系品種の苗5株を亜熱帯農業センター内の鉄骨ハウスに株間2m、条間2mで2004年10月14日に定植した。基肥で堆肥を5kg/株、N-P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>-K<sub>2</sub>Oを分量で各々0.2kg/株を施用した。追肥は3、9月に分量でN-P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>-K<sub>2</sub>Oを15kg/10a施用した。混み合った新梢の剪定を適宜行った。収量調査は毎週行い、樹ごとに収穫果数と果重を計った。初蕾から収穫適期までの収穫サイクルを求めめるために、2010年10月から2011年11月まで3樹において2回/週の定点撮影を行った（図1）。

【成果の概要】

1. 収穫ピーク：収穫盛期の春季と秋季は200果/週/樹以上となった。2008年から2011年の週の平均収穫果数である43果/樹/週を超えたピークは2008年で8回、2009年で9回、2010年で9回、2011年で7回であった（図2）。
2. 収穫サイクル：発蕾から収穫適期までの期間は34.2±8.6日(n=134)であった。発蕾時期が春季の場合は34.8±6.5日(n=38)、夏季の場合は25.5±2.7日(n=52)、秋季の場合は35.7±4.5日(n=26)、冬季の場合は46.8±6.9日(n=18)となり、収穫サイクルは夏季に短く、冬季に長かった。
3. 収量の因子：収量に影響を与える因子として平均果重と収穫果数との相関関係を求めた結果、収量は収穫果数と正比例の関係を示した（図3、4）。平均果重を大きくするよりも着果数を増やすことが収量増加に寄与することが明らかになった。
4. まとめ：定点撮影結果から発蕾から収穫適期までの平均収穫サイクルは34.2日間であることが明らかになった。また、収量調査結果から平均収穫果数40果/樹/週を超えるピークの回数は年7～9回であることが明らかになった。両者より小笠原村で施設栽培すると結実開始から3年目以降は1年中、収穫サイクルを繰り返していることが明らかになった。収穫サイクルは夏季に短く、冬季に長いことから、気温や日長時間の影響を受けていることが考えられた。

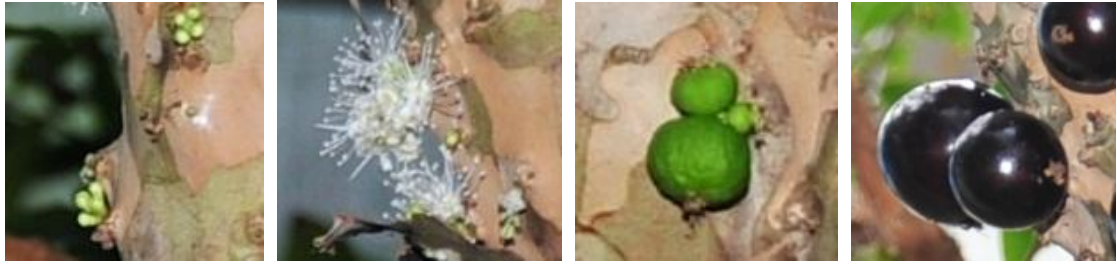


図1 ジャボチカバ大葉系品種の発蕾 (左), 開花 (左中), 結実 (右中), 収穫適期 (右)

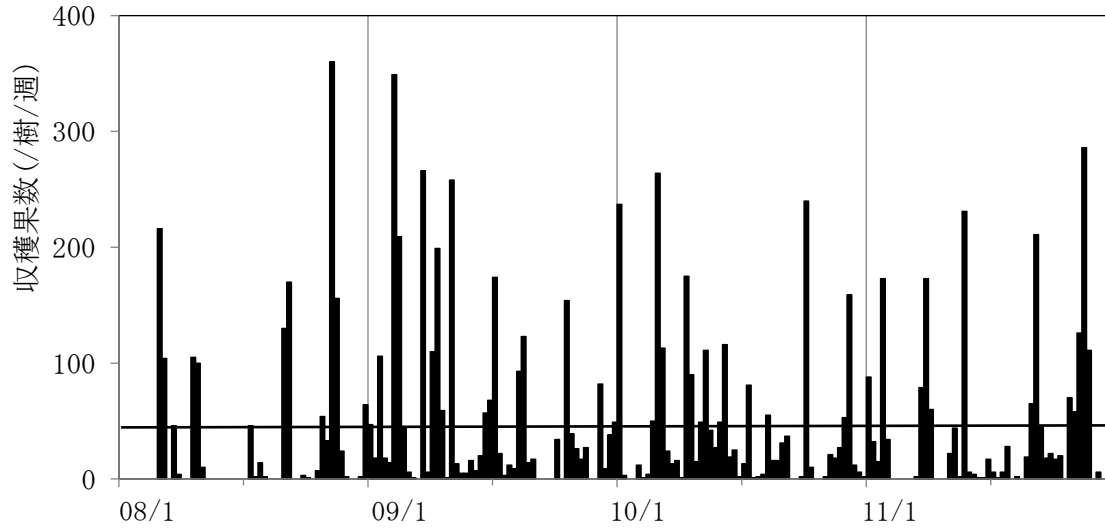


図2 ジャボチカバ大葉系品種の中で最も収量が多い樹の週ごとの収量の推移  
a) 図中の横実線は収穫果数が43果/樹/週 (2008~2011年の平均収穫果数)

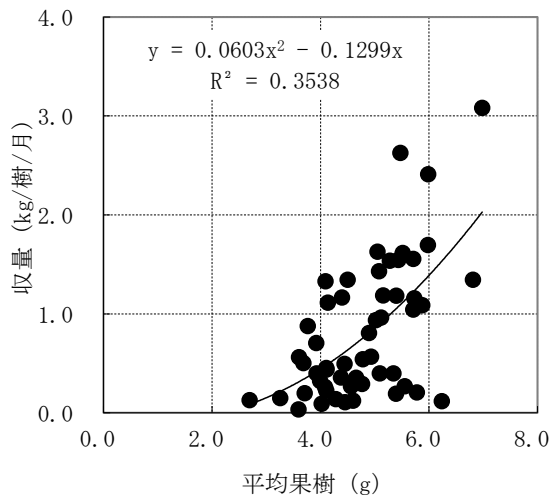


図3 2007年から2011年におけるジャボチカバ大葉系品種の収量と平均果重の関係

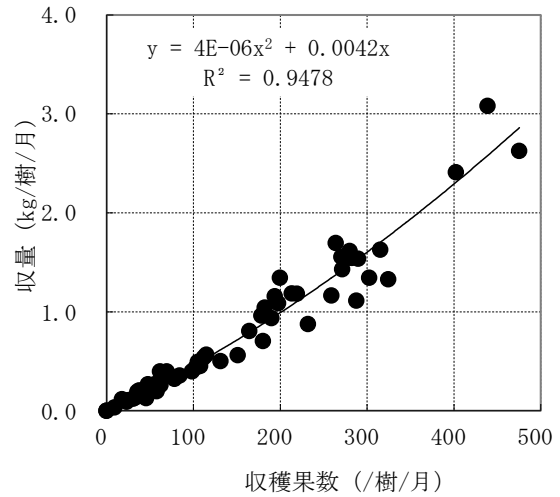


図4 2007年から2011年におけるジャボチカバ大葉系品種の収量と収穫果数の関係